

＜帯広小学校の研修からアプローチする目指す子ども像＞

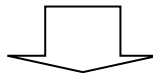
「自分が好き 友だちが好き 学校が好き 帯広の街が好きな帯小っ子」

- (1) 対話を通して違いの考えや違いやよさに気づき、自他の思いを大切にできる子ども
- (2) 集団の中で、自分のよさを生かしながら、友達と信頼・協力できる子ども



研究主題

「自己を見つめ、互いを認め合いかわりあう子どもの育成」
～互いのよさや違いを認め合う人間関係づくり～



これを受けて、のぞみ学級(知的障がい学級)では、以下のような子どもの育成を目指す。

＜のぞみ学級の目指す子ども像＞

- (1) 共に学ぶことにより、自己理解・他者理解を高め、様々な思いを考えることができる子ども
- (2) 友だちや地域社会の人達と関係性をつくり、共に生きることが出来る子ども

※研究主題、目指す子ども像のキーワードと特別支援教育との関連から（道徳的実践力との接点）

●自己を見つめ

→社会の中で生きていくときに、他者とのかわりが重視されているが、他者とかわりをもつためには、自己を見つめることが重要となる。自己を見つめ、自分の考えや感じ方、思いを明らかにし、「なるほど」「そうだったのか」「自分はこうしたい」などの思いをもち、他者からの評価に対し、耳を傾け、さらに自己を見つめることで、自分というものの良き理解者を自己の中にも存在させることが大切である。

●違いを認め合う

→人には違いがあるのがあたりまえであり、違いをもっているからこそ、多様性である。必要以上に形式的平等重視に陥らずに、自己理解をベースに、ゆるぎない自己肯定感を高めた上で「違っていい」ことや、その違いを認め、その人のよさに気付く力を育てていくことが大切である。教師自身の価値観の転換、子どもへのかかわりについても「一人一人に応じて」を大事にしていくことが必要である。

●共に生きる 共生社会の構築に向けて

→自分を取り巻く家族、友だち、学校や地域の人とのかかわりの中で生きている。「人も生き、自分も生きる」という意識に立つことが大切である。将来的には、自分で自立しながら、相手を思いやり、共に生きていく子どもを育てていくことが求められる。このことが、インクルーシブな社会、インクルージョンをめざすことにつながることになると思われる（排除しない、仲間外れにしないなど）。

1 のぞみ学級の研究について（設定の理由）

（1）今日的な特別支援教育の課題から

平成19年4月より特別支援教育が本格的に制度化されて10年が経過した。従来の特殊教育で進められていた理念が、通常学級においても支援を要する児童生徒に対して適切なサポートを進めていくことが浸透してきている。

特別支援教育の理念は「子ども一人一人の教育的ニーズに応じた教育」であり、将来の社会参加に向けて、生きる力を育むことを目的としている。さらに社会環境の整備を図ることで、インクルーシブな社会を構築していくことが強く求められている。

こうした中、全国的に見ても特別支援学級・特別支援教育諸学校の在籍する児童生徒の増加に伴い、特別支援諸学校・特別支援学級が急増している。帯広市においても同様の傾向にあり、ほとんどの小・中学校において特別支援学級が設置されてきている状況にある。

また、幼児児童生徒の障害の重度・重複化、発達障害を含む多様な障害に応じた指導を充実するために、他者との関わり方の基礎に関することから集団への参加の基礎に関する内容とする「人間関係の形成」の項目が重視されている（自立活動）。学校生活においては特に集団への参加を適切に促し、一人一人の教育的ニーズを的確に把握し、より充実した教育実践・支援のあり方が将来的な社会参加・社会自立につながっていくものと思われる。

（2）本校の特別支援学級（知的学級）の児童の実態から

本校の特別支援学級は知的学級・情緒学級が設置され、この他に通級指導教室としてことばの教室が設置されている。

知的学級は主に知的な面に課題のある児童、情緒学級が主に情緒面に課題がある児童が中心とはなっているが、障害の重度・重複化、発達障害など様相としては多岐にわたっている。また、発達段階においてもそれぞれ差があったり、個人内差もみられたりするなど、指導形態・指導内容において工夫が必要となってくる。

今年度の知的学級は、2年生2名、3年生2名、4年生1名、4年生4名の計9名の在籍数となっている。

個別・小集団、比較的大きな集団、通常学級における学習（交流学习など）様々な学習場面が展開されるが、共通の課題としては子どもたちの主体性である。子どもたちが意欲的に参加できる授業のあり方、授業づくりを今後も検討していくことが必要である。

（3）平成26年度までののぞみ学級の研究課題から

平成26年度まで特別支援教育ブロックでは「確かな学力を身に付け、自ら未来を拓く児童の育成」～自分の考えや思いを表現することができる子どもを目指して～ という研究主題を設定して実践研究を進めてきた。

この中で研究仮説を2つに設定し、主な観点として、「教育的ニーズに応じた支援の在り方」と「自分の思いをもち表現し伝える力」に焦点を当て取り組んできた。

2年間の研究の成果として、教育実践発表会（公開研）、校内授業研を中心とした授業づくりでは、教材・教具の工夫や子どもの興味・関心のあるものを題材に授業に盛り込むなど、授業の中身がより子どもの実態からスタートすることができた。また、授業展開の工夫（小集団・個別・学年を考慮したグループ別の指導、見通しがもてる授業のあり方など）により、自主的に取り組んだり、生き生きと活動したりする場面が出てきた。

「自分の思いをもち表現し伝える力」については、子どもの課題（役割分担）を明確にしたり、教師の働きかけの明確化を共有したりすることにより、子どもたちの様々な力を発揮させることができた。

一方で、課題としては、前述した成果を継続的に取り組むことや見通しをもたせるための授業展開の工夫・改善、発達段階や興味・関心の差がある中での教材・指導方法の工夫・改善、合わせた指導

と教科との関連などがあげられた。

また、地域・社会とのつながりとして、5年前から取り組んでいるカレンダーの配布、新聞の配布などの活動も徐々に広がりつつある。地域に情報発信していくことにより、子どもと大人の関係性が深まってきている。卒業後に地域で生活することを視野に入れながら、より地域の力を高めていくという観点からも、この活動は今後もさらに充実させながら展開していきたいと考える。

(4) 本校の研究主題「自己を見つめ、互いを認め合いかわりあう子どもの育成」から
本校の研究主題から、特別支援教育の研究との関連・整合性について

- ・「自己を見つめ」→「自己理解」
- ・「互いを認め合う」→「他者理解」, 「多様性（価値観）」
- ・「かわりあう」「人間関係づくり」→「関係性」「つながり」

以上、上述の4つの観点から、「自己理解」「他者理解」「多様性」「関係性」「つながり」をキーワードに、子どもたち一人一人が生き生きと学校生活を送れるようにつなげていきたい。

さらに、子どもたちの最終的な目標は「社会自立・社会参加」である。子どもたち一人一人のニーズに応じた教育から豊かな学習活動を展開し、「地域社会」につながる取組をさらに進めていきたい。

(設定の理由の構造図 図3参照)

2 研究主題にアプローチする手段としての学習活動 ～生活単元学習を中心に～

のぞみ学級では、領域・教科を合わせた指導として「日常生活の指導」「生活単元学習」を、様々な学習形態で取り組んでいる。

「生活単元学習」とは、生活そのものを有効な教材と捉え、一定期間あるテーマに向けて取り組む学習活動で、各領域・教科の内容が含まれる。ただし、領域・教科の内容を習得させるための手段ではなく、生活上の課題を成就するための活動である。

のぞみ学級の生活単元学習では、学校生活・行事・季節・調理・遊び等をテーマにして単元を計画し、授業を行っている。生活単元学習では、生活する中で処理しなければならない課題を解決する力を育てたり、生活に必要な力を身に付けたりすることを目指している。生活に必要な力としては、研究主題に含まれる文言も関連するものであり、「自己理解」「他者理解」「多様性」などの項目も扱っていききたいと考える。

なお、生活単元学習の授業の展開については、下記(図1)の流れを大切にしながら取り組んでいくものとし、生活単元学習と道徳との関連については図2のとおりである。

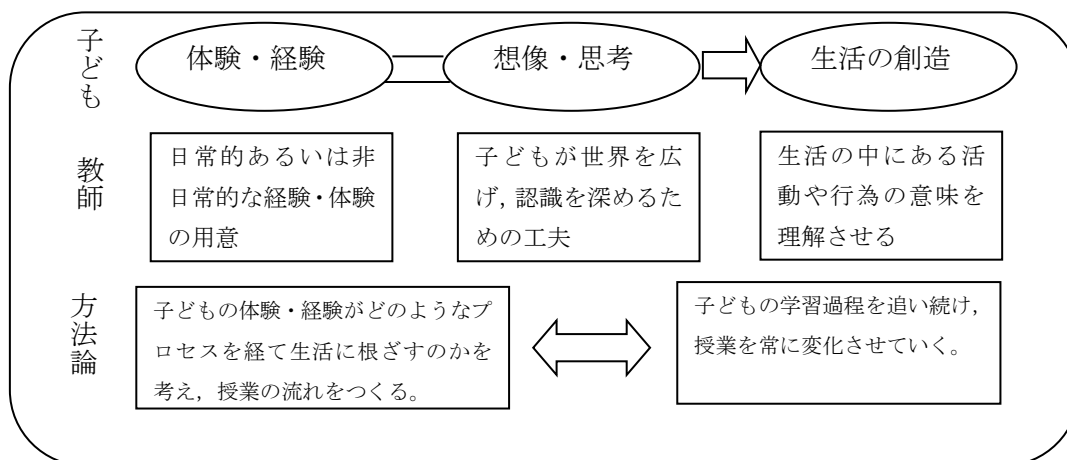


図1 生活単元学習の授業展開

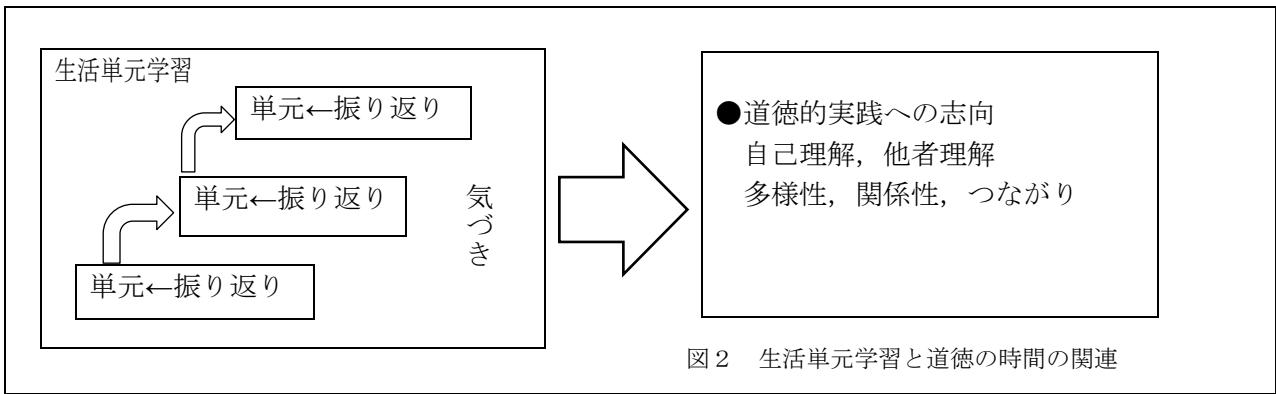


図2 生活単元学習と道徳の時間の関連

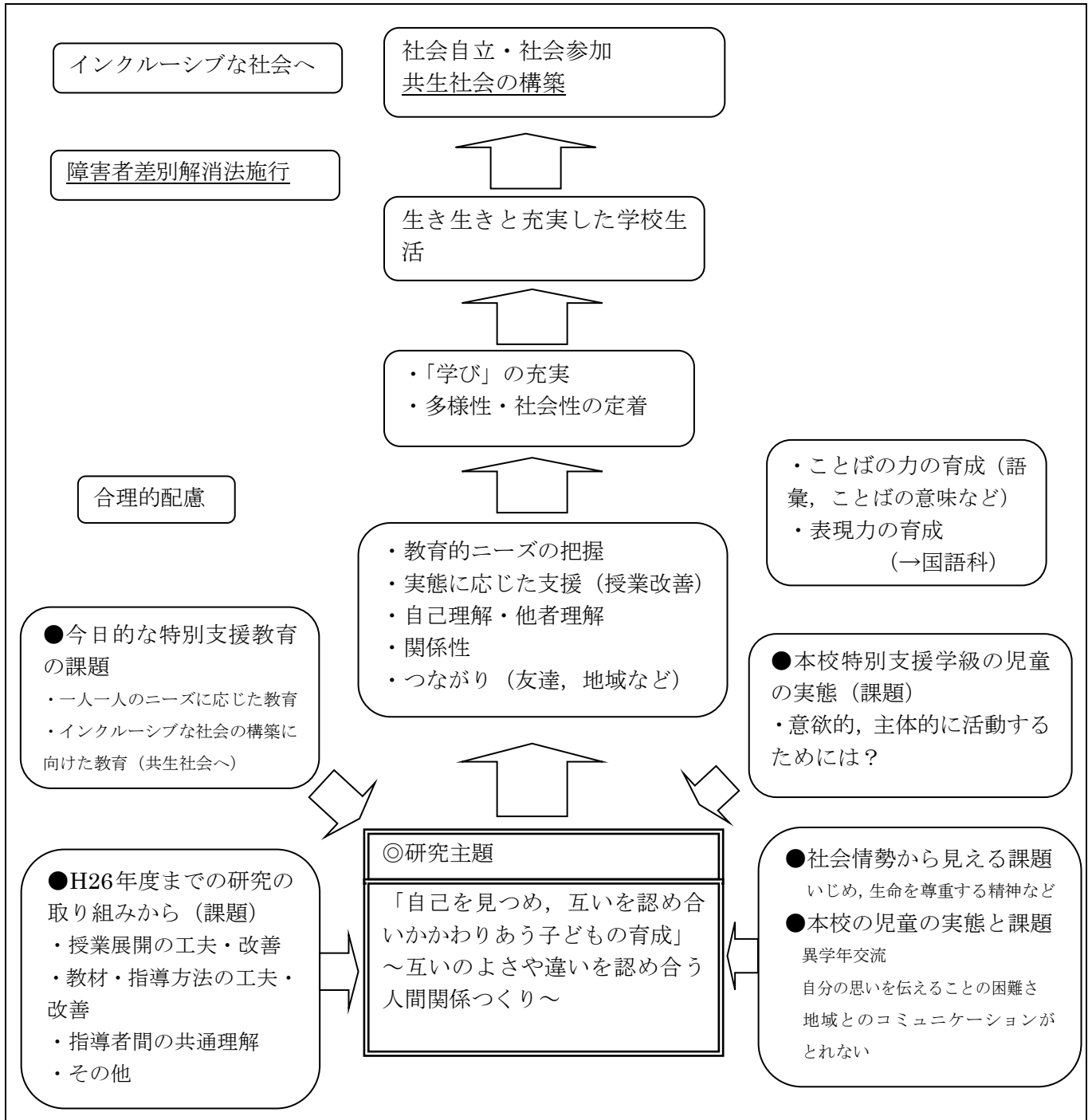


図3 のぞみ学級の研究主題の全体構造図

3 研究仮説

<p>● 仮説 1 一人一人の教育的ニーズを把握し、実態に応じた支援を工夫することで、意欲的に学習に取り組み、生活に必要な力が高まる。</p> <p>● 仮説 2 様々な人との交流の機会を広げることで、自己理解につながり、他者との違いを認識しながら、関係性をつくることことができる。</p>

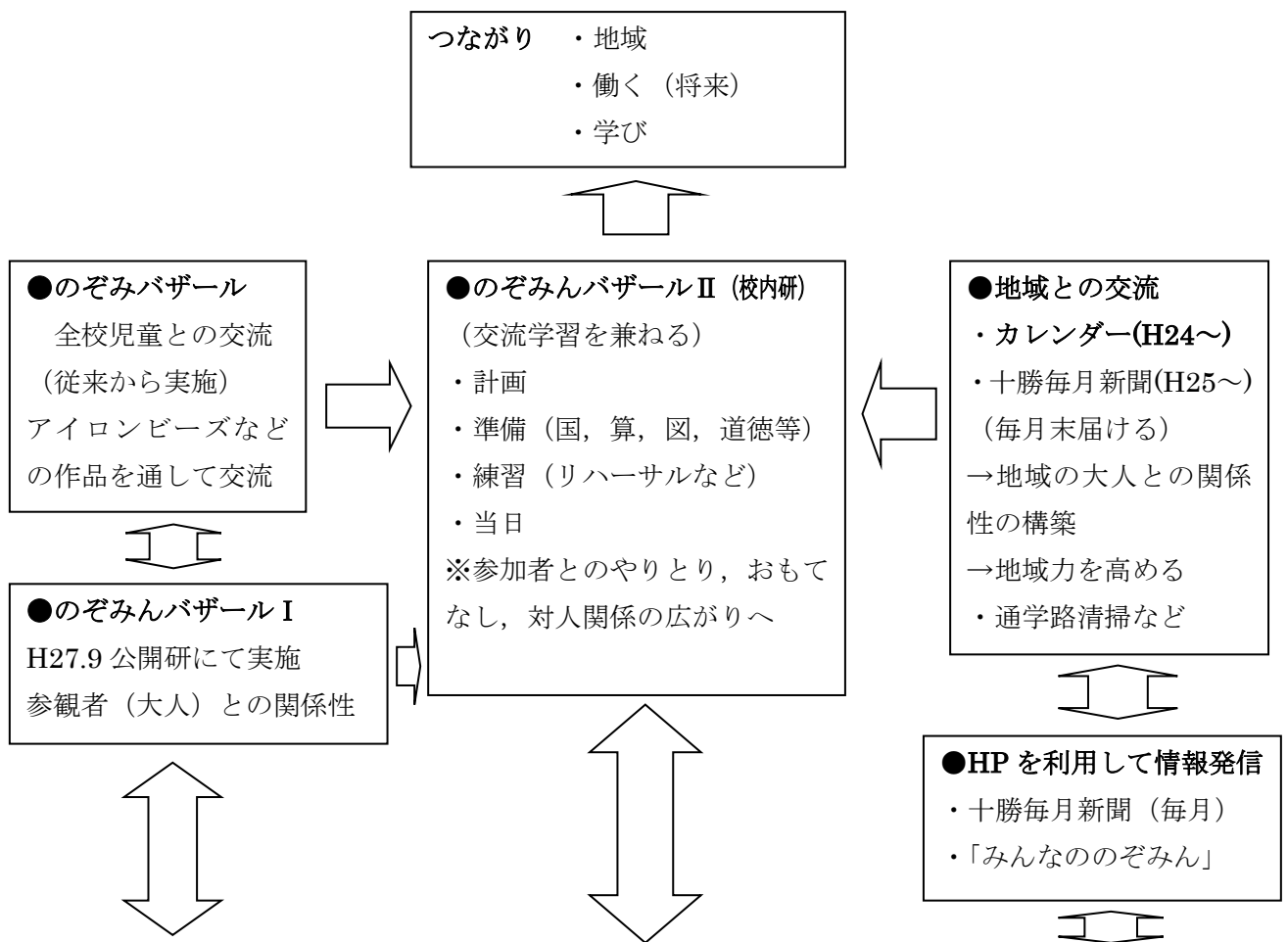
4 研究内容

<p>● 研究内容 1 意欲的に活動できる授業, 生活力を高める授業のあり方</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習環境, 教材・教具の工夫および改善 ・学習展開の工夫・改善 ・具体的な指導事例・実践の積み重ね 	<p>● 研究内容 2 自分の思いの表出, 他者への理解につながる工夫と展開</p> <ul style="list-style-type: none"> ・語彙の獲得 ・個に応じた表現方法の展開 ・表現する場の設定
<p>◎授業づくりの視点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 個々の実態に応じた課題の設定 2 見通しをキーワードとした学習展開 3 主体的に活動できる学習内容の構築 	<p>◎自己理解・他者理解についての視点</p>
<p>・仮説検証, 実践例の蓄積 ・学習の振り返り(自己評価) ・児童の成長(変容)の見取り ・インクルーシブ教育についての学び(展望) ・個別目標や支援の方法などについて改善・充実</p>	

5 三年次計画の二年目 (H28 年度) におけるのぞみ学級における実践研究

月	活動内容	成果	課題
4	<ul style="list-style-type: none"> ・主題設定の理由, 研究計画の立案 	<ul style="list-style-type: none"> ・全校研究主題および H26 年度までの研究の反省をもとに 3 年間を見通した研究計画を企画することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・道徳および道徳的実践力との接点・関連について
5	<ul style="list-style-type: none"> ・生活単元学習についての年間計画の見直し 	<ul style="list-style-type: none"> ・従来から実施してきたものの見直しや児童の実態に応じた課題を盛り込んだ新たな単元を設定することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教科との関連性
9	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実践発表会における授業公開および検証 (題材名「のぞみんバザールをひらこう」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の取組を深化させる形で学習を展開することができた。「おもてなし」をキーワードに, 相手(お客さん)をより意識させての取組であったが生き生きと楽しく活動することができた。 	
1	<ul style="list-style-type: none"> ・校内授業研における授業公開および事後研修における検証 (題材名「やくそくをまもってあそぼう」) 	<ul style="list-style-type: none"> ・3つの遊びを通して「聞く・みる・考える・想像する」「約束を知る・約束を守る」などの要素を取り入れて授業を展開した。発達段階により参加の仕方は個々に差はあるが, 楽しく活動することができた。 	
3	<ul style="list-style-type: none"> ・二年目の成果と課題の整理 	<ul style="list-style-type: none"> ・イメージキャラクター「のぞみん」を利用しながらの学習活動や, 「遊び」の学習は, 「人との関わり」が活動の中心となる。活動の中で相手の気持ちを考えたり, 約束を守ることによって友だちと楽しく活動できたりする経験が, 道徳的実践へとつながっていくと思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意欲的に活動できる授業, 生活力を高める授業の教育実践の積み重ね ・望ましい子どもたちの評価, 見取りの在り方

資料：のぞみ学級の取組の概要（経緯）



●「のぞみん」キャラクターを活用しての教育活動の展開

- ・全校児童教職員への呼びかけにより決定 (H26,3)
- ・着ぐるみ (各種行事に参加)
- ・のぞみん T シャツ (保護者作成)
- ・のぞみんソング (「みんなののぞみん」♪) の作成 (作詞・作曲はプロの方に依頼)
- ・のぞみんバザールにて、商品開発・作成 (ティッシュ, 箸, カレンダーその他)
- ・のぞみんランドの活動 (H26 校内研, H26,2 3年生との交流, H27,12 1年生との交流)
- ・のぞみんの仲間たちの募集 (現在集約中)

●八起会 (保護者会) の学習会の開催 近隣の学校にも呼びかけ, 親の学びの場として広がり

- ・H26 中学校 (特別支援学級) について (講師: 中学校教諭)
- ・H27 思春期・青年期に抱える課題と支援 (講師: 教育大釧路校 二宮氏)